

タコは王蟲？

眞鍋由比

『愛しのオクトパス—海の賢者が誘う意識と生命の神秘の世界』サイ・モンゴメリー著 亜紀書房2017

先月紹介した『ボブという名のストリートキャット』ですが【ボブという名の猫 幸せのハイタッチ】というタイトルで8月26日に日本公開されます。本校でも夏休みの宿題お助け講座が始まっている時期ですが、今から楽しみですね。

さて今回はタコです。タコはデビルフィッシュ（悪魔の魚）と呼ばれて西洋では嫌われ者だと思っていました。寿司ネタとして食べる日本人としてはわりとコミカルなイメージがありますが、このサイという女性にかかるとタコほど有能で美しく神秘的な生き物はいない、ということになります。心臓が3つあって、生涯1度しか恋をせず、タコよりも人間に興味がある…（タコは交接のあと、メスがオスを食べちゃったりするそうです。共食い）

オスと出会っていないから無精卵を何万と抱えている母ダコがひとつひとつの卵にせっせと酸素を送る様、掃除をする様子、えさを食べずに面倒をみている姿に心を動かされます。生涯の最後に卵を抱えるようになるとタコは食べなくなるそうです。そして死ぬのを待つ。でも老いてなにも食べないタコが、餌をもらうためではなく、著者たちにあいさつをするために浮かんでくるシーンは切なくなります。タコは人間を個別認識できる。好き嫌いすらある。そしてこちらがイライラしているとその感情すらあの吸盤のついた足で察知するんです。あの足は切られてもしばらくは動きを止めず、脳の命令を聞き、情報をしばらく共有できるそうです。

サメすら同じ水槽に入れたら捕食するためでなく、殺すことの出来る戦略家であるタコ。硬い甲羅を持たず、無防備であるがゆえに擬態が得意でなんにでもなれ、どんな小さな穴にでも入り込める。人間3人を6本の脚で相手をしながらちゃっかり魚の入ったバケツを気づかれずに残りの2本で後ろにもっていくタコ。何と高い知性と感情を持った生物なんだろうと感心せずにはられません。まるで「風の谷のナウシカ」の王蟲！

この本はノンフィクション作家が書いた本です。タコの生態が詳しく書かれているし、水族館に通い詰めてその様子を飼育係やボランティアと一緒に世話をしているすっかりタコのファンになった人の話です。だからタコの知性や感情があるといってもそれこそ人によってタコは態度を変えるので、必ずしも友好的な態度をとってくれたりはいないでしょう。アナコンダを手なづけてひざに乗ってくるようにした飼育係の話も出てきます。が、動物に対してはある程度は用心した方がいいとは私は思います。みんながみんなナウシカにはなれません。けれど人間だけが知性や感情を持っているわけではない、と思うと少し世界が広く明るくなったような気になりませんか？

